

伝奇から話本へ : 鶯鶯物語の変遷を中心に

黄, 冬柏
九州共立大学准教授

<https://doi.org/10.15017/13197>

出版情報 : 中国文学論集. 37, pp.91-105, 2008-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

伝奇から話本へ —— 鶯鶯物語の変遷を中心に ——

黄 冬 柏

一 伝奇と話本

「伝奇」という言葉の定義について、王国維は『宋元戲曲考』（十六「餘論」）の中で、次のように論じている。傳奇之名、實始於唐。唐裴鉞所作『傳奇』六卷、本小說家言、此傳奇之第一義也。至宋則以諸宮調爲傳奇、元人則以元雜劇爲傳奇、…至明人則以戲曲之長者爲傳奇、…蓋傳奇之名、至明凡四變矣。（伝奇という名称は、実に唐代に始まる。唐の裴鉞が編んだ『伝奇』六卷は、元來小説家の作品であつて、これが伝奇の第一の意味である。宋に入ると諸宮調が伝奇と呼ばれ、…元人は元雜劇を伝奇と呼び、…明人になると、長編の戲曲を伝奇と呼ぶ。…思うに伝奇の名は、明代までに四度變化したのである。）

ここでは「伝奇」という言葉は、晩唐の裴鉞の小説集『伝奇』に由来するとされているが、実際には、裴鉞より六十年あまり早く、元稹の『鶯鶯伝』に始まつたと言つべきである。『鶯鶯伝』という題名は、実は『太平広記』の編者が勝手に付けたものに過ぎず、作者の元稹自身は本来それを「伝奇」と題していたのである。時代の流れとともに、「伝奇」は、時に文言小説の代名詞となり、時に戲曲の呼称となつた。このように一つの言葉が全く別の作品ジャンルを指すことが有り得たのは、その内容が深く関係しているからである。「伝奇」と呼ばれる作品について、「傳奇之作、大都演述故事、取材於才子佳人。（伝奇の作は、およそ故事を演述し、才子佳人に取材す。）」と述べる如く、才子佳人の恋愛物語が大部分であつた。すなわち『鶯鶯伝』に代表される恋愛物語こそが、歴代の「伝奇」に共通して描かれる主な題材なのである。『鶯鶯伝』が才子佳人小説の誕生を告げるのみならず、「伝奇」

伝奇から話本へ

という言葉の淵源ともなつたと考へるのは妥当なことではあるまいか。

一方、「話本」の概念について、魯迅は『中国小説史略』(第十二篇「宋之話本」)の中で、次のように述べている。説話之事、雖在説話人各運匠心、隨時生發、而仍有底本以作憑依、是爲「話本」。(説話とは、講談師がそれぞれ工夫を凝らし、即興で生み出すものだが、やはり依拠する台本はあつた。それが「話本」である。)

「話本」という言葉を文学史的視点から「説話」の台本ないし底本という意味で使つたのは、おそらく魯迅が初めてであろう。以後の学者は、概ね魯迅の説を受け継いでいる一方、異論や様々な解釈も出された。例えば、増田涉氏は「話本」という言葉の用例を考察し、「話本」とは説話人の底本を指すのではなく、説話のなかみ、つまり「故事」の意味であることを指摘した。

字面からすると、「話本」は一見、「説話の本」あるいは「説話人の本」というふうを受けとられやすいし、誰もあまり疑問をもたないで、簡単に受けとめるかと思うが、しかしあちこちに見えるこの言葉の用例を調べると、「話本」とは「故事」(物語、ストーリー)の意味に使われていて、それが「説話(人)の底本」の意味に使われている例は⁽³⁾どうも見えないのである。

そのほかに、「話本」と「話本小説」を区別したり、「簡本」と「繁本」とに分類して論じる見解もある⁽⁴⁾。いずれにしても、「説話」が宋元時代に盛り場で人気を博していたからには、その台本や底本の存在を想定するのは至極当然のことであるが、「宋代の講談と同時にいわゆる話本が存在したことを証明するには、現段階では材料が不十分であるといわざるをえない⁽⁵⁾」という指摘には、筆者も共鳴するところである。「話本」あるいは「話本小説」がどういった体裁なのかについては、その当時の資料と、現在に残された作品を分析しながら、詳細な検証が必要である。ちなみに、ここで取り上げる「伝奇」とは、唐代文言小説を指し、「話本」は宋元小説話本、しかも単行の体裁で残された作品を指す(宋代話本の実物は未だ発見されていない今日において、元代以降の人々による改編の可能性には否定できない)。魯迅はかつて「宋人之説話及影響」(『中国小説的歴史の変遷』第四講)の中で、「這類作品 不但體裁不同、文章上也起了改革、用的白話、所以實在是小説史上的一大變遷。(これらの作品は、体裁が異なるだけでなく、文体でも改革を起し白話を使用する。ゆえに実は小説史上の一大變遷なのであ

る。」と指摘したが、中国小説の歴史の中で、唐代伝奇から宋元話本への発展は、極めて重要な転換であることは疑い得ないだろう。

本稿では、唐代伝奇の名作『鶯鶯伝』とその影響を受けた話本小説との比較研究を通して、作者の意図と作品の特徴、および各受容層の嗜好や社会的な背景などの観点から、鶯鶯物語を題材とする小説が唐代伝奇から宋元話本へと、どのように変遷したのかを考察してみたい。

二 鶯鶯物語と宋元才子佳人小説

唐代において、元稹の『鶯鶯伝』により、文人士大夫の中で才子佳人小説が誕生したわけだが、次の宋代になると、小説をめぐる社会環境が大きく変わり、鶯鶯物語に代表される恋愛故事も、文人士大夫のサロンから民間芸能の世界へと広がっていった。宋の羅燁『醉翁談録』甲集卷一「小説開闢」には、八部門で一百七種の説話演目が記載されている。これらの演目は、口頭の「話」であって、当時において必ずしも書面の「本」であるとは限らない。その三番目が「伝奇」で、「鶯鶯伝」をはじめ、十八種の男女の恋愛を題材にした演目がこれに記録されている。

ここでの「伝奇」は、「説話」演目のうち、恋愛をテーマにしたものを指すことがわかる。そこで、これらの恋愛を題材にした演目を頼りに、『太平広記』『綠窗新話』『寶堂書目』および「三言」(『諭世明言』『警世通言』『醒世恒言』)などを比較対照して、(表一)の「唐代伝奇と宋元話本の関係表」にまとめてみた。

唐代伝奇の保存には、『太平広記』が重要な役割を果たしており、その『太平広記』は五百巻ほぼ全部が現存している。一方で『綠窗新話』は刊本こそ現存しないが、抄本は複数伝わっている。『綠窗新話』に収めている短文は全て宋代の講談師の話本であり、内容も多く恋愛物語であったのに対して、明の馮夢龍編輯の『諭世明言』『警世通言』『醒世恒言』、いわゆる「三言」に収めている話本小説が、宋元時代の姿をどれだけ残しているかは、検討課題である。紙幅の都合上、これら全ての作品に触れることができないので、傍線を引いた『鶯鶯伝』・『張公子遇崔鶯鶯』・『張浩私通李鶯鶯』・『宿香亭張浩遇鶯鶯』という、題目に「鶯鶯」が見える四作品を対象として、これらの小説の特徴および伝承関係について考察したい。

(表一) 唐代伝奇と宋元話本の関係表(恋愛題材)

唐代伝奇	『太平廣記』	『縁窗新話』	『醉翁談録』	『寶文堂書目』	話本
鶯鶯傳	張公子遇崔鶯鶯 楊愛愛不嫁後夫	鶯鶯傳 愛愛詞	鶯鶯燈 夜遊湖 紫香囊	張生彩鸞燈傳 香囊記	張舜美燈宵得麗女(『喻世明言』第二十三卷) 裴秀娘夜遊西湖記(『萬錦情林』第一卷)
柳氏傳	張浩私通李鶯鶯 沙滄利奪韓翊妻 文君窺長卿撫琴	牡丹記 章臺柳 卓文君	宿香亭記 失記章臺柳 風月瑞仙亭	王魁(『小説傳奇』合刊本) 宿香亭張浩遇鶯鶯(『警世通言』第二十九卷) 蘇長公章臺柳傳(『熊龍峰四種小説』) 俞仲舉題詩遇上皇(『警世通言』第六卷頭回)	
李娃傳	李娃使鄭子登科	李亞仙		李亞仙記(『小説傳奇』合刊本) 賣油郎獨占花魁(『醒世恒言』第三卷入話)	
崔護	崔護見水逢女子	崔護見水		金明池吳清逢愛愛(『警世通言』第三十卷頭回)	

大塚秀高氏はかつて宋代話本小説の研究法について、

種本を集めた書物としては、『縁窗新話』と『醉翁談録』が広く知られており、それぞれ南宋末及び元初のものとされ、いままでも利用されてきている。しかし、「話本」や「読本」と同じ話があるといったような論じられかたしかされておらず、それらと種本とのすじの違いや種本とそれともとなった話との相違点に注目する論調のものは見当たらない。これは話本の歴史に対する理解が足りない為と思われる。

と指摘した。以下、この指摘に留意しつつ、『張公子遇崔鶯鶯』と原作『鶯鶯伝』の異同について比較したい。

(表二)は、『縁窗新話』に収められる『張公子遇崔鶯鶯』(以下『張公子』と略す)の全文と、『太平広記』所収

(表二) 『鶯鶯伝』と『張公子遇崔鶯鶯』の対照表

<p>唐貞元中、有張生者、…浦之東十餘里、有僧舍、曰普救寺、張生寓焉。適有崔氏孀婦、…路出於浦、亦止茲寺。</p> <p>…顏色艷異、光輝動人。…張自是惑之、願致其情、無由得也。崔之婢曰紅娘、…婢因謂張曰：「何不因其德而求娶焉？」張曰：「若因媒氏而娶、納采問名、則三數月間、索我於枯魚之肆矣。爾其謂我何？」婢曰：「君試爲喻情詩以亂之。不然、則無由也。」張大喜、立綴春詞一首以授之。</p> <p>是夕紅娘復至、持綵牋以授張曰：「崔所命也。」題其篇曰「明月三五夜」。其詞曰：「待月西廂下、迎風戶半開。拂牆花影動、疑是玉人來。」</p> <p>…是夕歲二月旬有四日矣。…既望之夕、張因梯其樹而踰焉、達於西廂、則戶果半開矣。張生且喜且駭、謂必獲濟。至崔室、則端服儼容、大數張曰：「…特願以禮自持、無及於亂。」言畢、翻然而逝。張自失者久之、復踰而出。</p> <p>數夕、…則見紅娘歛衾攜枕而至。…俄而紅娘捧崔氏而至。…斜月晶瑩、幽輝半床。張生飄飄然且疑神仙之徒、不謂從人間至矣。…自是復容之、朝隱而出、暮隱而入、同安於曩所謂西廂幾一月矣。</p> <p>… (以下略：約600字)</p> <p>崔氏小名鶯鶯、公垂以名篇。</p> <p>(全文約3000字)</p>	<p>『張公子遇崔鶯鶯』(『綠窗新話』卷上)</p> <p>張君瑞寓浦之普救寺、崔氏亦止茲寺、</p> <p>光艷動人、張惑之。崔婢紅娘曰：「何不求婚焉？」張曰：「若待納采問名、索我於枯魚之肆矣。」婢曰：「君試爲情詩以亂之。」張遂綴春詞以授婢達之。</p> <p>崔答其題篇曰：「明月三五夜。」詞曰：「待月西廂下、迎風戶半開。拂牆花影動、疑是玉人來。」</p> <p>二月既望、張踰牆攀樹、達於西廂、戶果半開。張謂得之矣、至則嚴請無及亂、張自失而退。</p> <p>數夕、忽紅娘歛衾攜枕、引崔氏至。斜月晶瑩、疑若仙降。自是歡好幾一月。</p> <p>崔小字鶯。 (全文167字)</p>
--	---

の『鶯鶯伝』の同一場面の対照表である。『鶯鶯伝』では約三〇〇〇字の内容が『張公子』では一六七字と大幅に節略されているが、これは周夷氏の注によると、当時の人々は原作『鶯鶯伝』を熟知しているゆえに節略したとい

う。また、宋の文人趙令時は、当時の『鶯鶯伝』の流行の状況を次のように記している。

至今士大夫極談幽玄、訪奇述異、無不舉此以爲美話。至於倡優女子、皆能調説大略。(今の士大夫が世にも珍しい話を披露し、その奇拔さを競いあつ時、この『鶯鶯伝』を取り上げて、その素晴らしさを認めない者はいない。妓女たちの間では、誰でもがその粗筋を語ることができるほどである。)

伝奇から話本へ

趙令時のこの記述中の「調説」の語に基づいて、程毅中氏は、『鶯鶯伝』の小説は早くも北宋にすでに流行していたと指摘している。^①このように、宋代において『鶯鶯伝』は、前代の文人元稹の名声に乗り、且つ才子佳人という美しい話が人々に好まれるものであったことから、文人士大夫のサロンから市民娯楽の場所へ広まっていったものと考えられる。

ここでは話本『張公子』が原話『鶯鶯伝』のどの部分を省いたのかに注目したい。『鶯鶯伝』と『張公子』を見比べればわかるように、話本は『鶯鶯伝』の後半をすっかり削ってしまっている。この部分は、『鶯鶯伝』全文の半分以上を占めているだけでなく、作者元稹の創作意図を表した重要な内容であるのに、話本では全く無視されている。これは、ただ「世に西廂故事を知らないものはいないから」という簡単な理由だけで解釈できる問題とは思えない。周知の通り、唐代伝奇は六朝志怪の簡単な記述に比べて描写が具体的であり、また意識的に創作されたという点においても、中国小説の誕生と言つことができる。また、伝奇は叙事・詩・議論の三つの文体を含むものであり、^②作者は自分の創作意図に基づいて、直接議論を加えてもいる。『鶯鶯伝』の文末には、

張曰、大凡天之所命尤物也、不妖其身、必妖於人。予之徳不足以勝妖孽、是用忍情。時人多許張爲善補過者（張生「およそすぐれた女性に下される運命というものは、わが身に災いがふりかからぬ時は、必ずその女性に関わる者に災いがふりかかるものである。…私の徳はこうした災いに勝つことはできないので、情を忍んだのだ」と。世の人々は、張生がよく自分の過ちをつくったと認めた。）

という部分がその例である。議論は作者の考えが直接表明されているだけに、この「忍情」や「補過」などの文言はとりわけ重要で、この小説の主旨とさえ言えるだろう。

しかし、話本『張公子』においては、『鶯鶯伝』の中に挿入していた「会真詩三十韻」などの詩をはじめ、鶯鶯の張生へ送った変わらぬ感情と優れた文彩に溢れる長い手紙、そして今見た文末の議論の部分を全て捨て去り、先に挙げた伝奇の三つの要素で言つと、叙事の部分のみを残している。この変化の背景には、時代の流れに伴い、小説の主な享受層が変化し、新しい受容層の嗜好に応じたという事情があるのではないかと思われる。

唐代から宋代への変革は、社会の様々な面に変化をもたらしたが、その影響は文学史にも及んでいる。物質生産

の発展と商品経済の繁栄および市民階層の形成につれて文化の主導階層が士大夫層から都市住民層に移り、市民文化が形成され始めると、そうした変化が小説の内容や表現手段にも反映してきた。伝奇は文人の詩才や価値観を現したものであったが、話本は新しい享受層の嗜好や価値観に合わせたものとなった。つまり、唐代の文人サロンで誕生し、知識人のために書かれた『鶯鶯伝』は、そのままでは宋代の盛り場で、庶民の共感を呼び起こすことは不可能だったのである。特に当時の人々にとって、鶯鶯と張生という理想の才子佳人カップルが悲劇的な別れを迎えることは非常に残念なことだった。そこで、講談師は受容層である庶民の嗜好に合わせた新たな内容を付け加えて上演していたと考えられる。

こうした社会の状況を踏まえながら、次に、同じく宋代の作品と言われた二つの鶯鶯に関する話本小説の考察に移りたい。(表三)は、『張浩私通李鶯鶯』と『宿香亭張浩遇鶯鶯』の内容を比較してまとめたものである。

両作品は、題目や主人公の名前から見ても、『鶯鶯伝』を踏襲している。『鶯鶯伝』の具体的な内容と表現の異同については後述するとして、先に結論から言つと、両作品は明らかに『鶯鶯伝』の影響下に作られた話本小説だと思われる。(以下『張浩私通李鶯鶯』を『張浩』、『宿香亭張浩遇鶯鶯』を『宿香亭』とそれぞれ略称する。)

この両作品は同じく話本というジャンルで、同じ鶯鶯物語を扱っているながら、創作時期によって、表現や内容に大きな相違が見られる。上段の『張浩』は、単に物語を簡潔に叙述するのみで、登場人物や風景に関する描写は一切なく、詩文のやりとりも全く見当たらない。一方、下段の『宿香亭』は、作品の初めと最後に、それぞれ七言絶句詩を挿入し、物語の要旨と作者の評価を表わしている。また、主人公の容姿や心理なども細かく描かれており、出会いの場所である庭の風景も、登場人物の身分や心境に合わせて記されている。筋立てに関しては、『張浩』は、『張公子』と同じく、才子と佳人の恋の結末は不明のまま、講談師の解釈にゆだねられているが、『宿香亭』においては結末が明示されている点が異なる。約一千字に及ぶ結末部分は次の通り。

「宿香亭の交わりのあと、父親の転任のために、李鶯鶯は張浩と二年間別れていたが、その間に張浩は叔父の薦めと圧力によって孫氏という女性と婚約を結んだ。李鶯鶯は地元に戻り、自ら裁判所に赴いて、張浩が当時書いた詩を示して、自分たちの婚約の正当性を訴えた。裁判官は彼女の訴えを認め、大団円となる。」

(表三) 「張浩私通李鸞鷲」と「宿香亭張浩遇鸞鷲」の対照表

「張浩私通李鸞鷲」(綠窗新話) 卷上)	「宿香亭張浩遇鸞鷲」(警世通言) 第二十九卷)
張浩既冠未娶、家財鉅萬。	問向書齋閱古今、生非草木豈無情。佳人才子多奇遇、難比張生遇李鸞。話說西洛有才子、姓張名浩字巨源。自兒曹時清秀異衆、承祖父之遺業、家藏鐵數萬、緣此至弱冠之年猶未納室。
致一花園、奇花異卉、無不畢萃。	創置一園。中有：橫塘曲岸、露偃月虹橋、朱檻彫欄、疊生雲怪石、爛熳奇花點蕊、深沈竹洞花房。
一日、同友人共坐宿香亭下、	浩聞巷有名儒廖山甫者、學行俱高、可爲師範。一日、遊山甫間步其中。行至宿香亭共坐。
忽見一美女對牡丹而立。	忽逢見亭下花間、有流鸞驚飛而起。見一垂鬢女子、年方十五、携一小青衣、倚欄而立。但見：倚欄笑對牡丹叢。
浩私念得娶此女、其福非細、遂前揖問之。	浩曰：浩聞人多矣、未常見此殊麗、使浩得配之、足快平生。浩此時情不自禁、遂整巾正衣、向前而揖。
女曰：妾乃君家東隣也。偶父母不在、特啓隙戶、借觀盛圃奇花。然更有表情、倘不嫌醜陋、願奉箕箒。」浩喜出望外。	女子笑曰：妾乃君家東隣也。今日長幼赴親族家會、惟妾不行。聞君家牡丹盛開、故與青衣潛啓隙戶至此。浩聞此語、乃知李氏之女鸞鷲也。女曰：願無及亂、略訴此情。女曰：若不醜陋見疏、爲通媒酌、使妾異日奉箕箒之末、立祭祀之列、奉侍翁姑、和睦親族、成兩姓之好、無七出之玷、妾之素心也。不知君心還肯從否。浩聞此言、喜出望外。
女曰：君果見許、願求一物爲定。浩遂解紫綉帶、女以擁頂香羅、令浩題詩。攜手花陰、略敘倉卒之歡、女遂歸去。	女曰：兩心既堅、緣分自定。君果見許、願求一物爲定、使妾藏之異時、表今日相見之情。浩倉卒中無物表意、遂取繫腰紫羅綉帶。謂女曰：取此以待定議。女亦取擁頂香羅。謂浩曰：請君作詩一篇、親筆題於羅上、庶幾他時可以取信。女見詩大喜、取香羅有手、謂浩曰：無忘今日之言、必遂他時之樂。父母恐回、妾且歸還去。
一日、忽有老尼惠寂謂浩曰：君之東隣李氏小娘子鸞鷲致意、令無忘宿香亭之約。自此常令惠寂傳密意。	浩一日獨步閑齋、反覆思念、一段離愁、方恨無人可訴。忽有老尼惠寂自外而來、乃浩家香火院之尼也。謂浩曰：君東隣李家女子鸞鷲、再三申意。寂曰：令我致意於君、幸勿相忘、以圖後會。蓋鸞與寂所言也、君何用隱諱耶。自此香閣密意、書幌幽懷、皆託寂私傳。
時當初夏鸞鷲密附小柬、夜靜論牖、相會於亭中。	寂於袖中取彩箋小柬、告浩曰：鸞鷲寄君、切勿外啓。寂曰：其家初夏二十日、親族中有婚姻事、是夕學家皆往、鸞鷲病不行、令君至期、於牖下相待、欲逾牆與君相見、君切記之。屈指數日、已至所約之期。
鸞鷲曰：奴之此身、爲君所有、幸終始成之。	鸞鷲曰：妾之此身、今已爲君所有、幸終始成之。 (以下略約1000字)
(全文221字)	話名「宿香亭張浩遇鸞鷲」。當年崔氏賴張生、今日張生仗李鸞、同是風流千古話、西廂不及宿香亭。 (全文500余字)

李鶯鶯が崔鶯鶯の悲劇的な運命を繰り返さないのは、やはり、時代の変化に伴って、話本の作者が当時の受容層の嗜好や価値観に応じた結果と思われる。

同じく鶯鶯物語を題材とする金の董解元『西廂記諸宮調』は、伝奇『鶯鶯伝』から雑劇『西廂記』へと変遷の中で重要な役割を果たした作品である。この『西廂記諸宮調』の巻頭には、「此本話説：唐時這箇書生、姓張名珙字君瑞、西洛人也。…珙有大志、二十三不娶。」という文言があるが、『鶯鶯伝』における張生という名が、『張公子』では既に張君瑞となっているし、『宿香亭』の冒頭にも、「話説西洛有才子、姓張名浩字巨源、…弱冠之年、猶未納室。」という、『西廂記諸宮調』と非常に似た表現が存在するのがわかる。何より、『西廂記諸宮調』の結末の大団円は明らかに話本に影響されたものである。宋代の娯楽の場所では、様々なジャンルの作品が相互に影響し合い、人気のある物語を話本や諸宮調、雜劇などといった異なる芸能形式によって上演することも行われた。鶯鶯物語もおそらくこうした状況の中でモチーフを改変しつつ、広く流行していったと考えられるのである。

三 伝奇から話本への変遷

『宿香亭』の最後には、物語の総括と作者の人物評価を表わす一首の七言絶句がある。

當年崔氏頼張生 今日張生仗李鶯 かつての崔鶯鶯は張生を頼るも、いまの張生は李鶯鶯に仗る。

同是風流千古話 西廂不及宿香亭 ともに風流千古の話なるも、西廂は宿香亭には及ばず。

この「西廂は宿香亭に及ばない」というのは、ヒロインの性格として、『鶯鶯伝』の崔鶯鶯が『宿香亭』の李鶯鶯と比べて弱いという指摘である。

(表四) は、『鶯鶯伝』と『宿香亭』の異同表である。番号に沿って、両作品の人物像を含め、形式や内容に亘って分析してゆくと、伝奇から話本への変遷が具体的に明らかになる。

まず(一)では、それぞれの才子の恋愛・婚姻に関しての考えが告白されている。『鶯鶯伝』の張生は、「私こそ本当の色好みで、たまたま自分に合った女性が現れないだけである。どうしてかと言つと、およそ女の美しいもので、いまだ心を奪われなかったものはいないからだ。情のない男でないということはこれでよく分かっただろう。」

(表四) 『鶯鶯伝』と『宿香亭張浩遇鶯鶯』の対照表

『鶯鶯伝』	『宿香亭張浩遇鶯鶯』
<p>(一) 以是年二十、未嘗近女色。知者詰之、謝而言曰：「登徒子非好色者、是有淫行耳。余真好色者、而適不我值。何以言之？大凡物之尤者、未嘗不留連於心、是知其非忘情也。」</p>	<p>貴族中有慕其門第者、欲結婚姻、雖媒酌日至、浩正色拒之。人謂浩曰：「君今冠矣。男子二十而冠、何不求良家令德女子配君、其理安在？」浩曰：「大凡百歲因緣、必要十分美滿。某雖非才子、實慕佳人。不遇出世嬌姿、寧可終身鰥處。且俟功校名到手之日、此願或可遂耳。」</p>
<p>(二) 張曰：「昨日一席間、幾不自持。數日來、行忘止食忘飽、恐不能逾旦暮。若因媒氏而娶、納采問名、則三數月間、索我於枯魚之肆矣。爾其謂我何？」</p>	<p>浩一見之、神魂飄蕩、不能自持。浩曰：「君言未嘗、若不遇其人、寧可終身不娶。今既遇之、即頃刻亦難遒也。媒酌通問、必須歲月、將無已在枯魚之肆乎。」</p>
<p>(三) 至崔至、則端服儼容、大數張曰：「特願以禮自持、無及於亂。」</p>	<p>女曰：「妾之此來、本欲見君。若欲開樽、決不敢領。願無及亂、略訴此情。」</p>
<p>(四) 崔之東牆、有杏花一樹、攀援可踰。既望之夕、張因梯其樹而踰焉。達於西廂、則戶果半開矣。 (張生 跳牆幽會)</p>	<p>寂曰：「鶯鶯傳語、他家所居房後、乃君家之東牆也、高無數尺。令君至期、於牆下相待、欲逾牆與君相見、君切記之。」 (鶯鶯 跳牆幽會)</p>
<p>(五) 崔已陰知將訣矣、恭貌怡聲、徐謂張曰：「始亂之、終棄之、固其宜矣、愚不敢恨。」曰：「鄙陋之人、永以還棄、命也如此、知復何言。」</p>	<p>屈指數日、已至所約之期。鶯得詩、謂浩曰：「妾之此身、今已爲君所有、幸終始成之。」經數日、忽惠叔來告曰：「鶯鶯致意、願君莫忘舊好。候回日、當議秦晉之禮。」</p>

と述べている(括弧内は表四の本文傍線部、以下同じ)。彼の美人に好む気持ちを打ち出しているのに対して、『宿香亭』の張浩も負けてはいない。「およそ終の縁組みには、十分な美しさが必要だ。私は才子ではないが、佳人をとても慕っている。もし絶世の美人に遇わなければ、一生涯やもめで暮らしたほうがいい。」と語り、自らを「才子ではない」と謙遜しながらも、佳人を求める点において張生と酷似している。

(二)では、才子張生と張浩がそれぞれの佳人である崔鶯鶯と李鶯鶯に出会って、ともに恋に落ち、「自分の感情を抑えきれない」という気持ちを表している。(三)では、才子の抑えきれない心境を見通して、どちらの佳人も

「礼儀に従って身を慎み、よこしまな行為に至らぬようになさいませ」と強く戒めている。(四)では、いよいよ才子と佳人が結ばれる時を迎えるが、『鶯鶯伝』では才子が木にはしごをかけて塀を超え、西廂の所までやってきたのに対して、『宿香亭』では佳人が自ら塀を越えて才子に会うために宿香亭へやってきた。ともに塀を乗り越えて相手に会いに行く点は変わらないが、実行者が異なっており、特に『宿香亭』で佳人が積極的に行動している点は、次にも見える彼女の性格付けの一翼を担っていると言えるだろう。

ここまででは、両作品の類似点が多く見られたが、(五)では、大きな相違点も見せている。張生が試験のために長安へ出発する前、崔鶯鶯は「よこしまな道から始まり、最後に捨てられるのは、しかたのないことで、私は恨むことはできない。…田舎にいる人が永久に捨てられるのは、運命がそうなのであって、何も言うことはない。」と棄てられた運命に直面して、非難もなく、ただ嘆き悲しんでいる。一方で『宿香亭』中の李鶯鶯は、「この気が弱くて悲劇的な崔鶯鶯とは正反対の姿勢を取っている。父親の転任のために、李鶯鶯が張浩と別れを告げる時に、「幸いにもこの縁が成ったのだから、あなたが今までの恩愛を忘れないことを願う。私の戻ってくる時を待って、結婚の相談をしよう。」と力強く恋人に求めているのである。

次に、人物像については、崔鶯鶯と張生、そして李鶯鶯と張浩という二組のカップルは、いわゆる「才・色・情」の三要素を兼ね備える才子佳人であり、出会いから、詩文のやりとりを通じて恋に落ち、付き合うまでの過程はいずれも調和がとれている。しかし、それぞれの人物の性格、および置かれた社会環境の違いによって、異なる結末を迎えることとなる。先程引用した(五)の文言からも窺えるように、崔鶯鶯が悲劇を招いたのは、彼女自身の内向的な性格によることも大きいのだが、より根本的な原因としては、やはり当時の婚姻制度と社会環境の問題を指摘するべきであろう。一方、李鶯鶯は、宋代という時代の常識の中で官僚の娘に設定され、性格も強く、積極的に愛情を追い求めるように描かれている。特に自ら才子張浩に告白し、しかも一旦相手に裏切られた時にも、そのまま済まさずに、告訴という方法で自分の愛情を守ったのである。二人の才子についても、それに対応するように描かれている。『鶯鶯伝』の張生は、最初に鶯鶯に求愛していたが、自分の名利を優先して崔鶯鶯との関係を一方的に断つてしまい、自ら「情を忍んだ」と弁解する。一方で『宿香亭』の張浩は、叔父の圧力に屈して他の女性と

婚約を結んだものの、彼自身、やはり李鶯鶯のことをずっと愛していたし、最終的に彼女と大団円を迎えるから、張生とは明らかに違つと言えよう。

才子佳人の以外の登場人物について、話本に登場する陳公という裁判官の存在が大きな意味を持つことも指摘すべきであろう。彼は最後に李鶯鶯と張浩の結婚を認めて大団円を迎えさせたわけだが、その判決文にこそ作者の意図が強く表われており、当時の社会状況や受容層の願望などを知る上で重要なのである。

出会った場所と筋立ては似ているが、結末の相違は今まで述べた通りである。それは両作品の主旨が異なるからなのである。『鶯鶯伝』については、前に触れた張生の「忍情」の文言と元稹の「補過」という観点に尽きる。一方、『宿香亭』の場合には、「花下相逢、已有終身之約・中道而止、竟乖偕老之心。在人情既出至誠、論律文亦有所禁。宜從先約、可斷後婚。(花の下で出会い、すでに一生の約束があるのに、途中でやめるのは、共白髪の心にもとるものである。人情においては真心を出したが、法律を論じてもやはり禁止するところである。先の約束に従うべきであり、後の婚約をやめるべきだ。)」という判決文からわかるように、男女の真心こそが婚姻の基礎であると主張しているのである。

『鶯鶯伝』は第二節で見たように、叙事・議論・詩歌の三つの文体を兼ね備えている。全体に文言で簡略に物語を順序よく叙述しており、詩語や詩そのものを多用し、文末に議論を付け加えて、文人の感傷的な情趣を溢れさせている。こういった文体の特徴は話本にも大きな影響を与えた。胡士瑩氏が指摘されたように、

「小説」話本自有一套比較完備的體制・格式。它的基本體裁、可分爲六個部分：一題目、二篇首、三入話、四頭回、五正話、六結尾。(「小説」話本自体は一つの比較的完備する体制や格式がある。その基本体裁は、一：題目、二：篇首、三：入話、四：頭回、五：正話、六：結尾の六つの部分に分けることができる。)

とある。題目は七文字ないし八文字で主要人物の名前や物語の発生した場所を表す。篇首は一首の詩で全文の主題や主な内容を予告し、正話が物語本文である。結尾の部分では、話本の題目を言い聞かせた上で、全文の要旨と人物の評価を表わす一首の七言絶句を作っている。『宿香亭』の場合には、表三の一行目の詩が、篇首に当たる。

問向書齋閨古今 生非草木豈無情 書齋に暇をつぶして古今の本を読むが、草木でない以上無情であれようか。

佳人才子多奇遇 難比張生遇李鶯 佳人才子には奇遇が多いが、張生と李鶯の物語にはかなわない。

そして、結尾では、「話本の題名は『宿香亭張浩遇鶯鶯』である」と述べたあと、先に取り上げた七言絶句詩で締め括っている。同じ才子佳人の風流物語であっても、『鶯鶯伝』は『宿香亭』に及ばないと断言したところに、この話本の作者の自負を見ることができ、その自負の根拠となっているのはヒロインの身の処し方なのである。宋代の人々にとって、『鶯鶯伝』のヒロインの行動原理に不満を感じることこそ、『宿香亭』を産み出した、という創作の動機もここから読み取ることができよう。

最後に、言語風格から見ると、夙に緑天館主人（馮夢龍）が指摘したように、「大抵唐人選言、入於文心。宋人通俗、諧於里耳。」（およそ唐人は文語を選んで文意を表していたが、宋人は通俗なことはを用いて、庶民の耳に合わせている）⁽¹⁾という。すなわち、「伝奇は文人の手によって、文人の気持ちをとらえるものであって、話本は民間芸人の口あるいは筆で庶民を楽しませるものであるから、両者の表現、ひいては雰囲気、内容まで異なってくるはずなのである。『宿香亭』は早期の話本作品であって、完全な白話ではないが、伝奇よりも通俗な言葉で詳細に人物や風景などを描いており、穏やかな風格で庶民的な雰囲気を出しているのである。

四 おわりに

上述してきたことをまとめると、「伝奇」は唐代士大夫のサロンで語られた物語が文字に定着したもので、文人の筆で文人のために書かれたので、当然のことながら、文人自身の気持ちや価値観を盛り込んでいる。『鶯鶯伝』は優れた文人かつエリート官僚である元稹によって作られているから、こういった傾向は一層顕著だと言えよう。一方、話本は宋代の盛り場で行われた講談の台本であり、講談師あるいは不遇な知識人によって、記録されたものだが、受容層である庶民達の嗜好に因應するため、様々な工夫と変化を凝らした。つまり、同じ題材の鶯鶯物語で、表現などに似ている点があったとしても、時代の流れと受容層の変化に伴って、表された価値観は全く異なるのである。程国賦氏が、「一言以蔽之、如果說唐傳奇是貴族文學、宋元話本就是典型的市民小說」（一言でいえば、もし唐の伝奇が貴族の文学だと言つたら、宋元の話本は典型的な市民小説であろう）⁽²⁾と論じているのが、正鵠を射ている。

以上、鶯鶯物語の変遷を通して、伝奇から話本への変遷における本質的な相違の一端を窺った。

注

- (1) 詳しくは、拙稿「西廂故事の流伝と『伝奇』——『伝奇』という名称の変遷をめぐって——」(『日本中国学会報』第五十集、一九九八年十月)を参照されたい。
- (2) 明・伝真社・修文記・跋(蔡毅編著『中国古典戯曲序跋彙編』第121頁、齐鲁書社、一九八九年)
- (3) 増田涉「『話本』ということについて——通説(あるいは定説)への疑問——」(大阪市立大学『人文研究』第十六巻第五号、一九六五年)。現在の中国の学界でも増田説と同様の見解がある。例えば『中国古代小説百科全書』(中国大百科全書出版社、一九九三年)「話本」の項に、「有的學者曾認為、話本是説話人或説話藝術的底本。其實、『話本』二字就是『故事』的意思。」と。異論もある。例えば王昕『話本小説的歴史与叙事』(中華書局、二〇〇二年)第一章「総論」に、「如果不將話本在研究領域上定義為説書人的底本或文本、…將何以名之?按増田涉的説法、『喜聞話本』也可以改成『喜聞説話』、但在宋元時代把小説的文本稱為『説話』的情形、也不太常見、中国人一般想不到還能有這樣的改法。」と。ちなみに、ここでいう「喜聞話本」とは、明末の緑天館主人(すなわち馮夢龍)「古今小説・序」の「仁壽清暇、喜聞話本」を踏まえる。増田氏は、「この場合の『話本』も、『話文』とか『説話』あるいは『小説』といった語に置きかえられる抽象語——『故事』と解して十分だと思つのである」と述べている。
- (4) 例えば胡士瑩『話本小説概論』(中華書局、一九八〇年)第六章「話本的名稱」に「話本是説話藝術的底本、説話本身不就是話本、…由話本加工而成的、可稱話本小説、模倣話本而創作的、可稱擬話本小説。」と。石昌渝『中国小説源流論』(三聯書店、一九九四年)第五章「話本小説」に「書面化的『説話』就是話本小説。話本小説不是説話人的底本、而是摹擬『説話』的書面故事。」と。さらに程毅中『宋元小説研究』(江蘇古籍出版社、一九九九年)第八章「説話与話本」に「話本指説話人的底本、這只是一個比較概括的解釋。如果對具體作品作一些分析、至少可以分兩種類型。一種是提綱式的簡本、…另一種是語録式的繁本。」とある。

- (5) 中里見敬『中国小説の物語論的研究』(汲古書院、一九九六年)第七章「話本小説と白話文の成立について」
- (6) 羅燁『醉翁談録』(東京文求堂、一九四〇年)甲集卷一「小説開闢」に、「…有靈怪、煙粉、傳奇、公案、兼朴刀、桿棒、妖術、神仙。…論『鶯鶯傳』、『愛愛詞』、『張康題壁』、『錢椒罵海』、『鶯鶯燈』、『夜遊湖』、『紫香囊』、『徐都尉』、『惠娘傀儡』、『王魁負心』、『桃葉渡』、『牡丹記』、『花萼樓』、『章臺柳』、『卓文君』、『李亞仙』、『崔護覓水』、『唐輔何蓮』、此乃爲之傳奇。」とある。
- (7) 大塚秀高「話本と『通俗類書』——宋代小説話本へのアプローチ——」(『日本中国学会報』第二十八集、一九七六年十月)
- (8) 本稿の引用は、以下のテキストに拠っている。『鶯鶯伝』(汪辟疆校録『唐人小説』、上海古籍出版社、一九八二年)、『綠窗新話』(宋・佚名『芸文雜誌』)、『警世通言』(人民文学出版社、一九五六年)。
- (9) 周夷校補『綠窗新話』(古典文学出版社、一九五七年)「張公子遇崔鶯鶯」の注釈。
- (10) 趙令時『元微之崔鶯鶯商調蝶恋花詞』(『侯鯖録』卷五、中華書局、二〇〇二年)
- (11) 程毅中『宋元小説研究』第八章「説話与話本」
- (12) 伝奇というジャンルの特徴について、宋の趙彦衛が『雲麓漫鈔』(中華書局、一九九六年)卷第八に、「蓋此等文備衆體、可以見史才・詩筆・議論。」と論じている。
- (13) 王昕『話本小説の歴史与叙事』第二章「宋元話本職業化的敘事話語」に、「篇尾詩一般爲七言絶句、…除總括故事外、説書人還在故事與相同題材的作品間作了比較。所謂「西廂不及宿香亭」是就人物性格而言、這也是説書人一種誇飾的技巧。」とある。
- (14) 胡士瑩『話本小説概論』第五章「話本」
- (15) 明・緑天館主人「古今小説・序」(馮夢龍輯・緑天館主人評次『古今小説』、中華書局、一九九一年)
- (16) 程国賦『唐代小説嬗變研究』(広東人民出版社、一九九七年)第九章「白話小説与唐伝奇」